

卒業論文作成要項

はじめに

卒業論文は学生諸君にとって大学における勉学の総決算である。卒論は学生諸君がこれまで行ってきた試験問題の解答やレポートの作成とは、下記に述べる点で質的に異なる知的生産物である。

ここに、社会科教育専修の各卒論コースに共通する総論的な卒業論文作成要項を提示するので、卒論作成にさいして繰り返し参照するよう強く求める。

なお、各コースそれぞれの具体的な執筆要領あるいは卒論作成手引きなどについては、各コースの卒論指導教員が必要に応じてその都度指示する。

論文とは何か

卒業「論文」には、学術論文等と基本的に共通している諸特徴が存在する。以下、学術論文等の特徴について書かれている文献を参考にしながら、「論文とは何か」について概説する。

「論文」とは、「ある問題についての、自分の主張を、なんらかの調査あるいは文献研究に基づいて、合理的な仕方で根拠づけようとする、一定の長さの文の集まり」である。

以上の定義を別の言葉で表現すれば、卒論を作成するに際しては、おおよそ、以下のような作成プロセスが必要とされる。すなわち、

1. 卒業論文のテーマを設定し、研究目的を明確化する。
2. テーマに関する文献・史資料を収集し、これまでの研究（先行研究）を一通り総括する。
3. テーマに応じて、史資料の分析あるいは現地調査などを徹底して行い、卒論のテーマに関する実態を把握し整理する。
4. 他人の見解と自分の見解とを明確に区別しながら、論理的、実証的に検討し、考察を深める。他人の見解や他人の図表等を引用する場合は、文献名および引用箇所を明確化する。
5. 以上の考察を総括し、結論を提示する。
6. 論文作成に際して、依拠した文献を明記する。

以上の要件を満たしていないものは「論文とは言えない論文」、あるいは「卒論として不適切な論文」ということになる。より具体的に列挙すれば、「卒論として不適切な論文」とは、以下の通りである*1。

*1 それらは以下の文献に依拠して要約した。

1. 1冊の書物や、1篇の論文を要約したもの。
2. 他人の説を無批判に繰り返しただけのもの。
3. 他人の著書、論文の文章をほとんどそのまま書き写し、他人の説を自分の説のように見せかけている論文。
4. 先行研究の検討とその総括が著しく不足している論文。
5. 問題点の所在があいまいで、ただの概説にすぎないような論文。
6. 論述に論理の一貫性がなく、論述の展開に矛盾、飛躍があるような論文。
7. 卒論にしては、枚数が著しく不足している論文。

卒業論文の枚数

- 400字詰め原稿用紙の場合
本文が50枚から60枚になることを原則的目安とし、脚注等を含めた総枚数が、原則として100枚以内になるようにする。
- ワープロ等でA4サイズ用紙に印刷する場合
本文が20枚程度になることを原則的目安とし、脚注等を含めた総枚数が、原則として35枚以内になるようにする。
- その他の手段で作成する場合も、上記に準ずるものとする。

卒業論文作成の日程

- 10月中旬——卒論の中間報告会
 - * これまでの中間総括と今後の展望を示す。
 - * それまでに、先行研究の検討・総括、資（史）料に関する検討、あるいは現地調査等を行い、併せて、卒論の章立ても検討し明確化しておく。
 - * 中間報告といえども、卒論の基本構想を述べるだけの報告では不十分である。
- 1月20日前後——卒論提出 ⇒ 提出先は専修主任
- 2月中旬——卒論の最終報告会

卒業論文の判定

卒業論文および最終報告会での報告に基づき、専修会議において合否を判定する。

齊藤 孝 (1977), 『学術論文の技法』, 日本エディタースクール出版部。

門脇俊介 (1994), 「論文を書くとはどのようなことか」, 小林康夫・船曳建夫編『知の技法：東京大学教養学部“基礎演習”テキスト』所収, 東京大学出版会。